

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00500

研究課題名（和文）人間と動物の関係の多様性とその文学的表象の比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study about the Diversity of Relationships between Humans and Animals and its Literary Representations

研究代表者

鵜飼 哲 (UKAI, Satoshi)

一橋大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：90213404

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：今日動物福祉への関心が世界的に広まり、人間と動物の関係の歴史を再考する機運も高まっている。本研究では人間と動物の関係が文化的、歴史的に多様であることに着目し、文学作品によるこの多様性の表象を比較論的に研究した。公開シンポジウムには日本、沖縄、韓国、フランス、ベルギーの研究者が参加し、各自が属する文化圏のみならず、アイヌ、トルコ、ロシアなど隣接する文化圏における動物観を、政治的、宗教的コンテクストを重視しつつ考察した。また動物行動学、哲学的動物論、動物福祉運動の最新の動向を明らかにし、現代の動物研究における学際的アプローチの新たなあり方を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は日本語とフランス語を使用言語としつつも両言語文化の境界をはるかに超える多様な文化的、歴史的視野のもとで人間と動物の関係を考察した。動物の多様な生態に光を当てる文学作品が、人間と動物を峻別する固定観念を問い直し、両者の深い近接性を明らかにし示した点に重要な学術的意義が認められよう。近代文明が動物に行使してきた巨大な暴力から目を背けることを止め、人間の特権を自明視しない生物共生文化の創出に、文学、哲学、宗教が固有の貢献をなすことを示した点に貴重な社会的意義があると考えられる。成果は『動物のまなざしのもとで - 種と文化の境界を問い直す』（勁草書房、2022年）として公開された。

研究成果の概要（英文）：While the interest to animal welfare now spreads on the planetary scale, the necessity of rethinking the historical relationships between humans and animals is more and more keenly felt in international academic field. In this comparative study, we have highlighted the cultural and historical diversity of the relationships between humans and animals as is revealed by its literary representation. Japanese, Okinawan, Korean, French, and Belgic scholars presented their work in our public symposiums. They analyzed the vision of animals, not only in each of cultural spheres to which they belonged, but also in the sphere of neighbor cultures as Ainu, Turkey, or Russia, in placing a special emphasis on political and/or religious contexts. We estimate that our collective effort successfully marked the most advanced steps of literary critics, of philosophical animal studies, and of animal welfare movement by a new multidisciplinary approach in the field of modern animal studies.

研究分野：フランス文学・思想、ポスト植民地文化論

キーワード：動物 文学 哲学 宗教 政治 環境 戦争

## 1. 研究開始当初の背景

現代は人間による自然の技術的支配が頂点に達し、その結果毎年膨大な数の動物種が絶滅を強いられている危機的な時代である。この事態を克服することを強い動機として新たな知の枠組みが形成され、人間と動物の共生が可能となるようなアプローチが真剣に模索されつつある。動物に対する人間文化の多様な向き合い方に着目し、動物という異なる身体を持つ他者を尊重しうる新たな文化創出の道筋を探ること、そして文学的想像力がその目的にどのように貢献しうるかを問うこと、それが本研究が開始当初に設定した根本的な課題であった。動物行動学や分子生物学など、20世紀中期以降に自然科学において目覚ましい発展を遂げた新たな研究分野が、言語や道具など、伝統的に人間と動物を峻別すると考えられてきた諸基準を失効させ、人間と他の動物との種差が意味するものがあらためて問い直されている。哲学の分野では早くも1980年代に英語圏の学术界に批判的動物論が現れた。形而上学的人間主義が根強い大陸哲学においても、ポスト構造主義の思想家たちは動物の問いに積極的に取り組んだ。こうした理論的、倫理的なパラダイム転換が文学研究に及ぼしつつある影響を測定することも、本研究の主要な動機のひとつであった。

## 2. 研究の目的

文学作品は人文系の動物論において頻繁に参照されながら、文学研究固有の領域では動物文学の体系的な研究はようやく緒についたところである。本研究では古今東西の文学作品のなかに人間と動物の関係の多様な表象を発見し、比較文学的観点からこれらを研究することによって、種のあいだの差異、文化のあいだの差異に関する伝統的な認識を刷新することを目指した。また、文学作品における動物の表象を扱ったこれまでの研究では、私的な空間か野生の世界を舞台とする作品が多く取り上げられる傾向があったことを踏まえ、本研究では政治および宗教というコンテクストを重視することで、無限定に広がりがちな人間と動物の関係の文学的表象研究の方向性を限定した。また歴史的、文化的に規定された存在としての人間と動物の交渉を扱った作品を重視することによって、従来の研究の限界を超えていくことを試みた。

## 3. 研究の方法

文学研究の方法にこれまで理論的基盤を提供した人文諸学は、構造言語学、現象学的哲学、精神分析学等、いずれも他の動物に対する人間の固有性を前提とする点で人間中心的な枠組みを維持していた。近年この点がそれぞれの学問分野の内外で問題にされ、その動向は文学研究にも影響を及ぼしつつある。例えば虚構の概念はこれまで言語を固有の属性とする人間の真理経験をもとに構築されてきたが、近年では動物の行動に容易に観察される擬態と人間に固有とみなされてきた虚言のあいだに画然とした区別を立てる代わりに、痕跡の追跡や抹消の営みという動物と人間に共通する経験の位相で文学テキストの機能を分析する作業が着手されている。本研究は動物行動学、人類学、神話学、宗教学、哲学、政治学、歴史学、芸術学など、できる限り広範な学際的交流を組織してこの作業の発展に貢献するべく努めた。

## 4. 研究成果

本研究は4回の公開シンポジウムを組織することを軸にして展開された。各回の概要を以下に

記す。

2019年1月12日に第1回セミナー「動物のまなざしのもとでの文学」を一橋大学で開催した。村上克尚（日本学術振興会）「喪の作業から共生へ 津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴」、呉世宗（琉球大学、研究分担者）「金石範作品における動物「鴉の死」を中心に」、中井亜佐子「『ロビンソン・クルーソー』と『フォー』近代小説における労働、動物、言語」の三本の報告が行われた。村上報告では津島作品においてアイヌ民族の動物観への参照が他界した親族たちをいかに想起するかという問いと深く関連していることが明らかにされた。呉報告では金石範「鴉の死」に描かれる主人公による鴉の殺害が済州島4・3事件という歴史的状况に照らしてどのような暴力性を内包しているかが分析された。また中井報告ではデフォー作品におけるロビンソンの労働の様態、動物に対する暴力と愛着がロックやマルクスを参照しつつ検討され、そのリライトであるクツェー作品で女性の語り手が舌を奪われたフライデーと島の動物たちをどのような関心において接近させているかが論じられた。このセミナーの記録は一橋大学言語社会研究科の紀要『言語社会』14号（2020年）において公表された。以下、収録論文の表題を記す。

鷓飼哲「解題・動物のまなざしのもとにおける文学」

村上克尚「動物から世界へ - 津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴」

中井亜佐子「小説という箱舟のなかで - 『ロビンソン・クルーソー』と『フォー』」

呉世宗「はざまからまなざす - 金石範「鴉の死」における主体・状況・言葉そして動物」

2019年5月25日に第2回セミナー「動物たちと文化の境界を通過する - 宗教的信仰、政治、そして文学」を一橋大学で開催した。招聘研究者のカトリーヌ・パンゲ（フランス国立科学研究センター/社会科学高等研究院嘱託研究員）「イスタンブルの野良犬たち - 都市での人間/動物共生の物語」、研究分担者のフランソワ・ビゼ（東京大学）「<動物-寓話>の生成変化」の二本の報告がフランス語で行われた。パンゲ報告は20世紀初頭のトルコで起きたイスタンブルの野良犬の一斉駆除という出来事を取り上げ、イスラームの聖典における犬をはじめとする動物の地位の他の一神教との差異、帝国末期のエリート層が受容した西洋思想の動物観とイスタンブルの民衆の信仰のなかの動物観の隔たりを詳説した。ビゼ報告は人間的言語と動物の関係に関する人類学的表象の歴史的多様性を文学史、哲学史、人類学を横断しつつ検討した。また20世紀ロシアの詩人フレイブニコフとザボロツキーの作品の重要性を強調し、人間中心的世界観の現代的問い直しに両者の思想が占める先駆的な位置を明らかにした。

2020年11月17日に第3回セミナーをオンラインの国際講演会として行った。招聘研究者のヴァンシアヌ・デプレ（リエージュ大学）の講演「鳥たちとともに私たちの物語を脱テリトリー化する」はフランス語で行われた。ヴァンシアヌ報告は20世紀の動物行動学・鳥類研究の哲学的読み直しによって、人文科学と自然科学を横断する現代動物研究の最先端の現状を提示した。戦争と競争のナラティブに即した動物社会の記述は動物を本能に動かされる受動的な存在とみなす一方、動物がみずからを外界に適応させると同時に外界も変化するという中動的な観点を優先する対抗的なナラティブによれば、マーキングや擬態、鳥の歌は顕示行為による社会性の表現であり専有や保身以上に芸術に近い営みである。現在の鳥類研究ではテリトリーは境界付与による隣接関係の設定として再考され、支配的なナラティブの流れをおおきく変え

つつある。

2021年2月6日には第4回セミナー「軍事的暴力と動物」をオンラインで行った。申知瑛（延世大学・韓国）「専有された労働の中での逃走 強制動員の労働(と難民労働)についての記録文学の中の動物との関係」、沈雅亭（独立研究活動家）「性-種-資本-軍事システムと動物の場所-クィア的観点から奪還可能な未来を問う」、新城郁夫（琉球大学）「戦後沖縄文学なかの「蟹」-媒介される身体について」、鶴飼哲（一橋大学、研究代表者）「「アジア的身体」と動物 - 種と文化の境界で攻撃性を考える」の四本の報告が、すべて日本語で行われた。申報告は植民地期およびポスト植民地期に下層民衆が生きた動物たちとの近接性の諸相を検討した。安懐南の小説に見出される人間の動物との多様な同一化が分析され、抵抗や逃亡と動物性の関係など、動物論上の難問が作品解釈を通じて考察された。沈報告は韓国と米国の主流の環境保全政策と工場的畜産が戦争の論理を内在化していることを指摘した。「外来種」とされた野生動物の「根絶」は移民の迫害を、「生命派生商品」とされた動物の「処分」は人間社会のジェンダー規範を強化する。全身で生きる権利を剥奪されている動物たちが生きられる未来を構想するためには、性的身体其自然性を問い直す「クィア」的アプローチが必要であることが強調された。新城報告は日露戦争時の末吉安持の詩「寂寞」からアジア太平洋戦争期のハンセン病患者の状況を描いた国本稔の小説『紅い蟹』を経て、沖縄の日本「復帰」前夜の大江健三郎のエッセイ『沖縄ノート』、一九八〇年代の目取真俊の小説『風音』に至るまで、近代沖縄文学では蟹が繰り返し男性身体を侵食する存在として登場し、性差の混乱を引き起こすことを明らかにした。鶴飼報告は二〇世紀の革命運動と動物の遭遇の掘り起こしを試みた。第一次大戦期獄中のローザ・ルクセンブルクは私的な書簡のなかで野生の水牛との出会いの衝撃を証言し、自分を鳥の同類と感じる内心の秘密を告白した。一九五〇年代に革命運動の挫折に直面した黒田喜夫は動物への変身を通して詩的抵抗を企てた。現代アメリカの研究者スノウラ・テイラーによる障害者差別と動物差別の交差性の発見は、欠損として表象された人間の身体と動物の生の近接性を明らかにし、人間と動物の解放の不可分性を示唆した革命家や詩人の言葉の再読の可能性を開いた。

本研究は2018年度開始、2020年度完了の予定で進めていたが、コロナ禍のため2度の延長申請を行い認められた。第3回および第4回セミナーは招聘研究者の来日が不可能であったためオンラインで開催された。招聘費用として計上していた旅費が不要になったため、その額を研究報告書の単行本化のための費用に転用することを申請して認められた。報告書は鶴飼哲編著『動物のまなざしのもとで - 種と文化の境界を問い直す』という表題のもと、勁草書房から2022年6月23日に刊行された（352頁、初版1000部）。

以下、目次を記す。

## イントロダクション

「動物の問いと文学の問い」(鶴飼哲)

## 第1部 動物のまなざしのもとにおける文学

村上克尚「動物から世界へ-津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴」

中井亜佐子「小説という名の箱舟のなかで-『ロビンソン・クルーソー』と『フォー』におけ

## る動物たち」

呉世宗「はざまからまなざす-金石範「鴉の死」における主体・状況・言葉そして動物」

### 第 II 部 動物たちと文化の境界を通過する

カトリーヌ・パンゲ「イスタンブルの野良犬たち-都市での人間/動物共生の物語」(鵜飼哲訳)

フランソワ・ビゼ「<動物-寓話>の生成変化」(鵜飼哲訳)

### 第 III 部 軍事的暴力と動物たち

申知瑛「比較から近接地帯へ-専有された労働と非/人間動物の逃亡」(金友子訳)、

シム・アジョン「性-種-資本-軍事主義の共謀と動物の場所-クィアの観点から奪還可能な未来を問う」(シム・アジョン/イママサ・ハジメ共訳)

新城郁夫「媒介される身体たち-沖縄文学のなかの蟹をめぐって」

鵜飼哲「「アジア的身体」と動物たち-種と文化の境界に「隠された伝統」を探る」

### 第 IV 部 鳥として住まう

ヴァンシアーヌ・デプレ「わたしたちのナラティブをテリトリーから放つ、鳥たちとともに」  
(森元庸介訳)

「ヴァンシアーヌ・デプレとの対話」(聞き手・フランソワ・ビゼ、森元庸介訳)

あとがきに代えて(呉世宗)

「ヴァンシアーヌ・デプレとの対話」は本研究の一環として研究分担者のフランソワ・ビゼによってオンラインで行われた。このインタビューでデプレはエコロジーとテリトリーの関係をめぐる現在の哲学的傾向に注目し、中心の観念を保持する「環境」と無限定な接続に開かれた「生存域」を区別して、後者により大きな理論的射程を認めた。またフォン・ユクスキュルの「環世界」概念に関しては、種の固有性を過度に強調する傾向に懸念を示した。ジャック・デリダ、ダナ・ハラウェイ、クリストフ・バイイ等による人間例外主義批判が開いた思考空間で、トム・ヴァン・ドゥーレン、エリック・シュヴィヤール等は生物多様性概念の拡張を図っている。このインタビューはより若い世代の注目すべき仕事を含む、人文系の動物研究の現在の動向の精彩に富んだ見取り図を与えることとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鶴飼哲	4. 巻 14
2. 論文標題 動物のまなざしのもとにおける文学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 100-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31271	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村上克尚	4. 巻 14
2. 論文標題 動物から世界へ - 津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 112-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31271	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中井亜佐子	4. 巻 14
2. 論文標題 小説という名の箱舟のなかで - 『ロビンソン・クルーソー』と『フォー』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 129-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31271	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 呉世宗	4. 巻 14
2. 論文標題 はざまからまなざす - 金石範「鴉の死」における主体・状況・言葉そして動物	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 146-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31271	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鶴飼哲（編著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 動物のまなざしのもとで - 種と文化の境界を問い直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	F B i z e t  (BIZET FRANCOIS)  (70383495)	東京大学・教養学部・准教授   (12601)	
研究分担者	呉 世宗  (OH SEJONG)  (90588237)	琉球大学・人文社会学部・教授   (18001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 鳥たちとともに私たちの物語を脱テリトリー化する	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 動物たちと文化の境界を通過する－宗教的信仰、政治、そして文学	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ベルギー		リエージュ大学	
フランス		社会科学高等研究院	
韓国		延世大学	